

展開 2 教育内容・方法の検討

—平和をいかに教えるか

▶ 【発表構成】

- 0 はじめに
- 1 権威主義的パーソナリティ
- 2 ラベリング論
- 3 宗教と紛争解決学
- 4 社会的アイデンティティ
- 5 TOC思考プロセス
- 6 まとめ
- 7 引用参考文献

- ① 阻害・促進条件に関する諸学問の理論と事例
- ② メディアで流布している言説
- ③ 平和を拒むもの、平和を生み出すもの

0 はじめに

- ▶ 本発表の目的は、「展開1」で分析した平和教育方法を踏まえて、「展開3 教育目標・内容・方法の授業化」に生かせる題材を提示することである。
- ▶ また、ここでは、①「平和を拒むもの」、「平和を生み出すもの」はどういうものなのか、②平和の阻害・促進条件は何なのか、③阻害・促進条件に関する理論と事例、④メディアで流布している言説を取り上げて紹介する。

1 権威主義的パーソナリティー

I .権威主義的パーソナリティーとは

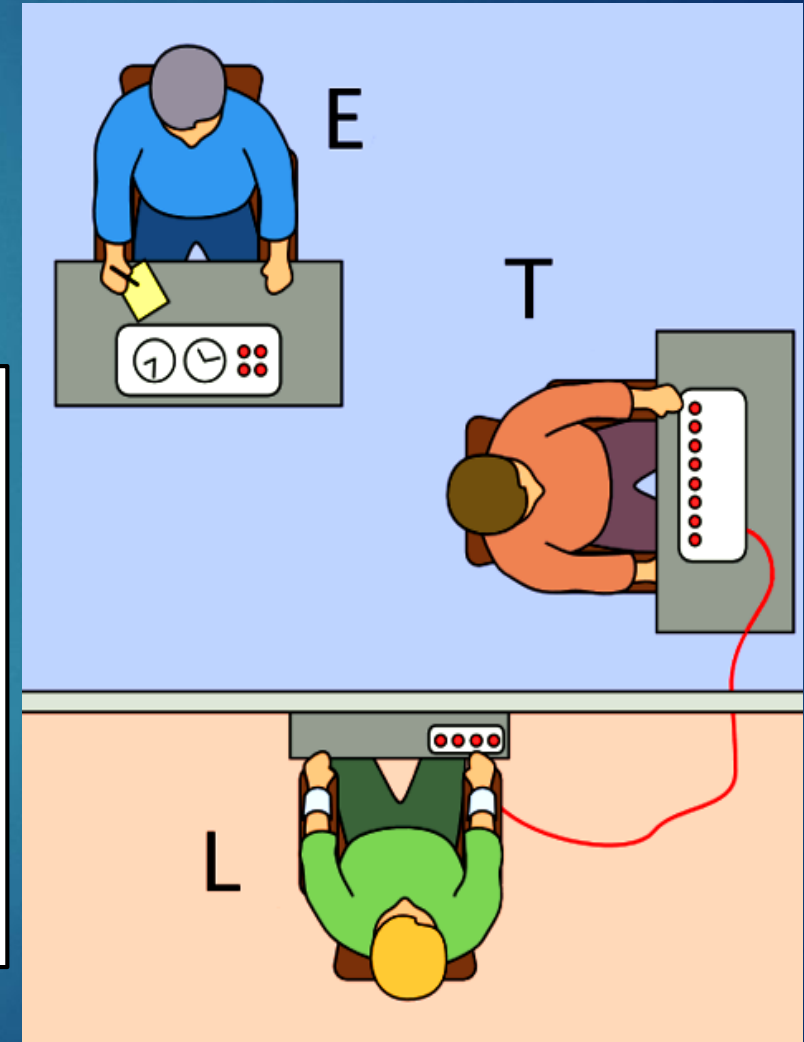
- ▶ エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』（1965）
 - ▶ 権威をあげ、権威に対して服従するが、それと同時に自分自身も権威を持ちたいと考え、他者を自分に服従させようとする性格型
 - ▶ 過度な自由は、人々を不安に陥れ、むしろ人の言いなりのほうが楽だという心理状態を招く→人間の「自動化」を進行させる
- ➡国民を弾圧し、他国への侵略を好む政治体制のファシズムを生み出した

アイヒマン実験

- ▶ エール大学の心理学者スタンレー・ミルグラムが実施
- ▶ 仮説：人間は自分より権威のある人に命令を受けると、自分の道徳意識や価値観にそぐわないことも遂行する傾向がある

【実験方法】

- ・ 15ボルトから450ボルトまで15ボルトごとに30段階の目盛りがついた、二セモノの電気ショック装置を作り、記憶に関する実験をする、と言って被験者を集める。
- ・ 被験者はくじで「生徒役（サクラ）」と「先生役」に分かれ、生徒役は電気椅子に括り付けられる。
- ・ 「先生役」はついになった言葉のリストを渡され、それを「生徒役」に読み上げて覚えさせ、「生徒役」が間違えるごとに電気ショックを与えるよう指示される。
- ・ 1回間違えるごとに電気ショックを強めていくよう指示する。



<https://www.youtube.com/watch?v=EkOEiWxNmNs> ミルグラムのアイヒマン実験

アイヒマン実験の結果

- ▶ 全体の3分の2の被験者が450ボルトまで上げる
- ▶ 被験者の声
 - ▶ 「エール大学のようなところがやっているんだからちゃんとした実験だろうし、俺なんかが口を挟めるようなことじゃない」
 - ▶ 「この実験には大事な目標があるみたいだし、実験に志願した自分としてはそのために役割を果たさなきゃ」
 - ▶ 「お礼が支払われるんだからやらなきゃ」
 - ▶ 「電気ショックは苦痛だけど危険ではないって説明してたから言われたままにしておけばいいんだ」
- ➡ 仮説「人間は自分より権威のある人に命令を受けると、自分の道徳意識や価値観にそぐわないことも遂行する傾向がある」は証明される

人間の「自動化」を防ぐためにはどうすればよいか？

- ▶ フロムは自由そのものを批判したわけではない
- ▶ 自由は2種類存在する

- ▶ ① 消極的自由

平和を拒むもの

伝統的な権威や束縛から解放されようとする「～からの自由」。この種の自由を追求する場合、いったんそれを獲得してしまうと、人はその後何をすればよいのかわからず不安になり、ファシズムを受け入れてしまう。

- ▶ ② 積極的自由

平和を促進するもの

個人が活動的に、また自主的に生き、自分の潜在能力をフルに引き出そうとする自由。真の民主主義を達成するためにはこちらが重要。

Ⅱ.平和を拒むもの（消極的自由の状態）

- ▶ 消極的自由の状態にある人々は「同調行動」をとる
- ▶ 「同調行動」は自分の態度や信念を集団の規範に合わせてし

何が起ころかわから
ないのでとりあえず
同じ行動をとろう

人と違うことをして嫌
われたくない、仲間外
れにされたくない

例：「このテレビ番組は使っています！」「このCMはいいので
すか！？」というTV番組やCMにつられて購入する

【心理学者アッシュの実験】（集団の圧力を証明）

間違えようのない簡単なカードを使った問題を学生のグループに答えさせるというもの。グループの中にわざと間違った答えを言うサクラを混ぜることで、学生たちがサクラの答えに同調するか否かを調べた。結果は、サクラに全く影響されず正答をつづけた学生は、全体の26%に過ぎなかった。なお、サクラを使わずに答えさせた場合、150回に一回しか答えを間違えなかった。

Ⅱ.平和を促進するもの（積極的自由の状態）

同調しやすい人の特性（クラッチフィールド、クローン、マーロー）

- ▶ 1、社会的関係が未成熟 ⇔ 成熟した社会的関係がある
- ▶ 2、社会との関わりに自信を持っていない ⇔ 社会に向けて開けている
- ▶ 3、性格が固く、権威主義的 ⇔ 柔軟な思考ができる
- ▶ 4、社会からの承認を求めている ⇔ 社会の一員としての自覚を持っている
- ▶ 5、知的な影響力を持たない ⇔ 主体的に社会に参加・参画できる

全ての市民が
これらの資質
を備えた状態
が平和

<展開Ⅰとの関わり>

以上の資質を獲得していくことが平和へとつながる。そしてそれらは展開Ⅰのそれぞれのめざす人物像と関連していると考えられる。

1 ← 社会的結束

2 ← 人権教育

3 ← 紛争解決、異文化理解

4、5 ← 複アイデンティティ

Ⅲ.メディアで流布している言説

▶ ナチス影響下のドイツ



- ▶ 2012年、小説『帰ってきたヒトラー』出版
- ▶ ヒトラーが現代にタイムスリップして物まね芸人として再び大衆の心をつかんでいく様子を描く
- ▶ 2015年映画化

<http://gaga.ne.jp/hitlerisback/index.html>



IV.教材化のメリット

- ▶ 命令に従い、支配されて恐ろしいことをしてしまう人は、弱い人でも、愚かな人でもなく、さらには年齢・性別・性格を問わない
- ▶ 激しいストレスの中で支配され、恐ろしいことをしてしまうことは日常的に起こりうる
- ▶ 例えば、学校でも、クラスの中でみんながストレスを溜めると、クラス全体が一人をいじめてしまう構造が生じる

これらの不安要素を平和教育を通して認識することは、成熟した民主主義社会へ寄与するのではないかと考えられる。

2 ラベリング論

I. ラベリング論とは何か

- ▶ 他人もしくは他集団を規則から逸脱したものとしてラベルを貼ることによって、双方（ラベルを貼る側・貼られる側）に与える影響を分析する犯罪社会学の理論（タンネンバウム, 1938 1960年代にアメリカで注目される）

- ▶ 【逸脱の定義】

「社会集団は、これを犯せば逸脱となるような規則を設け、それを特定の人々に適用し、彼らにアウトサイダーのラベルを張ることによって、逸脱を生み出すのである。この観点からすれば、逸脱とは人間の行為の性質ではなく、むしろ他者によってこの規則と制裁とが「違反者」に適用された結果なのである。」（H.S.Becker, 1973）

双方への影響

ラベルを貼る側

- 逸脱者を非難することで、自分たちは「共同体の健全な市民」としてのアイデンティティを確保する
- ラベルを貼るという行為が、掻き立てられた恐れや疑惑の根拠としてマスメディア等に取り上げられる可能性がある



貼られた側

- 「予言の自己成就」（状況についての誤った定義が新しい行動を引き起こし、その行動が当初の誤った考えを現実のものとする）が発生し、否定的な自己アイデンティティを形成させてしまう
- 規則の不公平な適用が行われる可能性がある



Ⅱ. ラベリング論における負の影響の克服 (平和の**阻害**・**促進**)

ラベルを貼る側

- 悪者のアイデンティティをつける「烙印付け」→当人を社会から排除してしまい、常習的逸脱者にしてしまう



- 行為は非難するが、当人のアイデンティティは本質的に善いものとして扱う「再統合的恥付け」→当人を社会に包摂しうる

この両者（多数派の少数派受容かつ少数派の意見主張）が達成されている状態が平和
→展開Ⅰの社会的結束と関連

貼られた側

- 第二次的逸脱（当人を非難するラベル付けが個人の内部に取り込まれている状態で行われる逸脱）



- 第三次的逸脱（ラベル付けを差別として再定義し、自分たちのアイデンティティを肯定的で価値のあるものと主張して、アイデンティティの損傷を乗り越える過程にある逸脱）

Ⅲ.メディアで流布している言説

- ▶ 1960年代のアメリカの黒人差別
- ▶ 「ブラック・イズ・ビューティフル」の標語を掲げ、マイノリティーの権利獲得運動を行う
- ▶ これは、ラベルを貼られた側の第三次的逸脱（自分たちに貼られた不当なレッテルを差別と捉え、自分たちのアイデンティティを肯定的にとらえ、権利を主張する）に該当する



写真 黒人公民権運動の「ワシントン大行進」（1963年）

<http://jp.wsj.com/articles/SB10001424127887324361104579035651436725362>

IV.教材化のメリット

- ▶ ラベリング論を通して、ラベルを貼るという作業によって普段の自分たちがマジョリティにもマイノリティにもなりうることを、両者の立場に立って考えられる。
- ▶ 社会的にも日常的にも線引きは起こっており、特定のアイデンティティに縛り付けられることへの問題関心を喚起できる。
- ▶ 「善き市民」を再検討し、その中身を常に再編していく姿勢を育成できる。

3 宗教と紛争解決学

I .理論

▶ 宗教とは、

- ①超自然的で神聖な存在や現世とは異なる次元の聖なる世界を観念。
- ②①に対する秩序だった体系的理解と教義を持つ。
- ③信仰者たちの行動や世界観の形成に大きな影響を与える。
- ④同じ信仰を持つ人々が形成する社会集団と理解することができる。

3 宗教と紛争解決学

I .理論

- ▶ 宗教は、紛争に何らかの影響を与えている。
- ▶ ただし、宗教そのものが紛争の直接的原因になっているものは少ない。

(例1) インドネシア、ポソ県

クリスチャンVSムスリムの紛争発生

双方の信者による教会・モスクの焼き討ち、互いの虐殺

実際は、

クリスチャン系先住民VSムスリム系移住民の土地資源を巡る争い

3 宗教と紛争解決学

I .理論

(例2) ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争

ムスリムVS東方正教徒（セルビア人）VSカトリック（クロアチア人）

教会やモスクの焼き討ち、互いの虐殺

実際は、

他者への恐怖、私怨、3集団の力関係といったこの地域特有のローカルな事情が原因

3 宗教と紛争解決学

I .理論

- ▶ 以上の例から、宗教が直接的な紛争の原因になっているとは言い難い。
- ▶ しかし、宗教が紛争に何らかの影響を与えていることは確か。
- ▶ ここでいう「平和」とは、「紛争がない状態」あるいは「紛争が起こりえない状態」を指すと考えられる。

- ▶ では、**宗教のもつ紛争悪化要因と、平和促進要因は何があるか？**

Ⅱ. 平和を拒むもの（宗教と暴力）



イスラム国

（画像引用元：

<http://toyokeizai.net/articles/-/80502>）

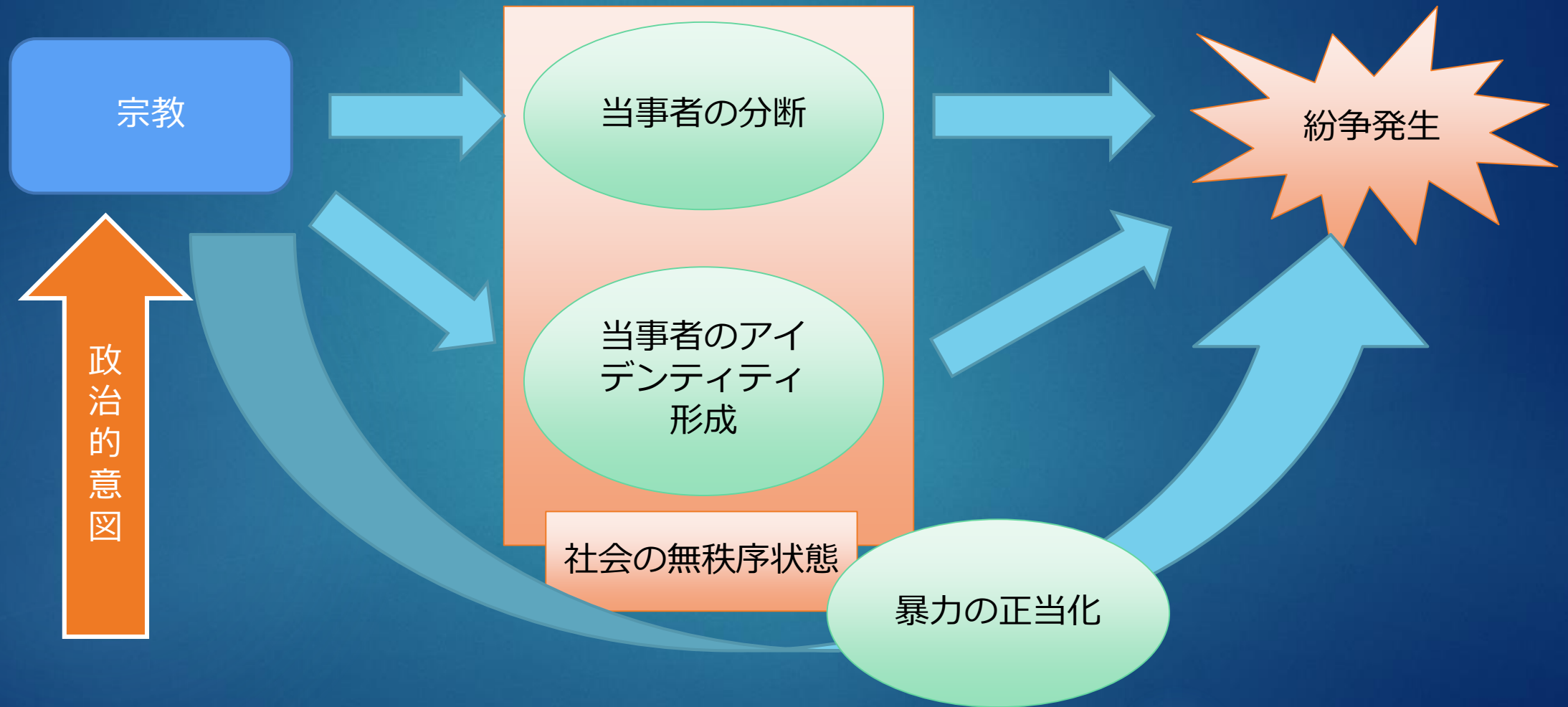


ボスニア紛争

（画像引用元：

<http://wldintel.blog60.fc2.com/blog-entry-265.html>）

Ⅱ. 平和を拒むもの（宗教と暴力）



Ⅱ. 平和を促進するもの（宗教と平和）

- ▶ そもそも宗教は、個人レベルでは、
心の安寧や魂の救済といった精神的平和の追求が目的。
- ▶ 集団レベルでも、秩序の回復、平和の促進を促す一面も存在する。

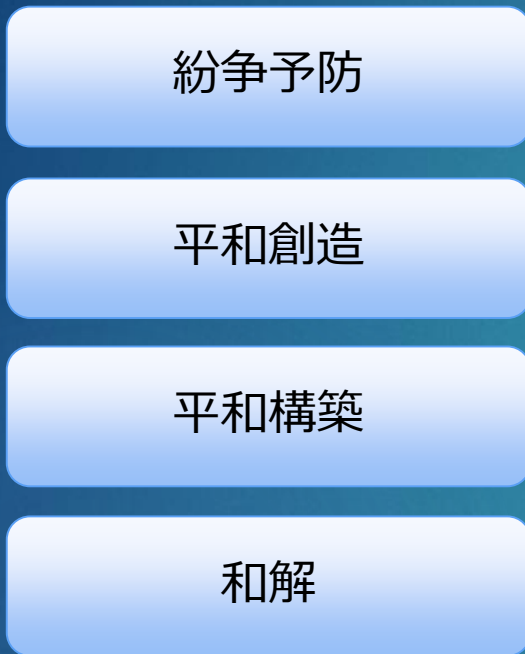
Ⅱ.平和を促進するもの（宗教と平和）



聖エジディオ共同体
(画像引用元 : <http://santegidio.jp/>)

Ⅱ. 平和を促進するもの（宗教と平和）

▶ 紛争解決の様々な段階



宗教アクターによる紛争解決もこれらの様々な場面で行われる。
アプローチも、政治指導者層から一般市民まで多様。

- ▶ 宗教アクター：宗教指導者や信仰に根差した理念のもとで活動する団体や個人。

Ⅱ. 平和を促進するもの（宗教と平和）

▶ 宗教アクターによる紛争解決の代表的場面

① 和平合意に向けた仲介

→ 争いの当事者でない第三者による紛争当事者間の交渉や合意履行を援助するための介入。

② 移行期正義

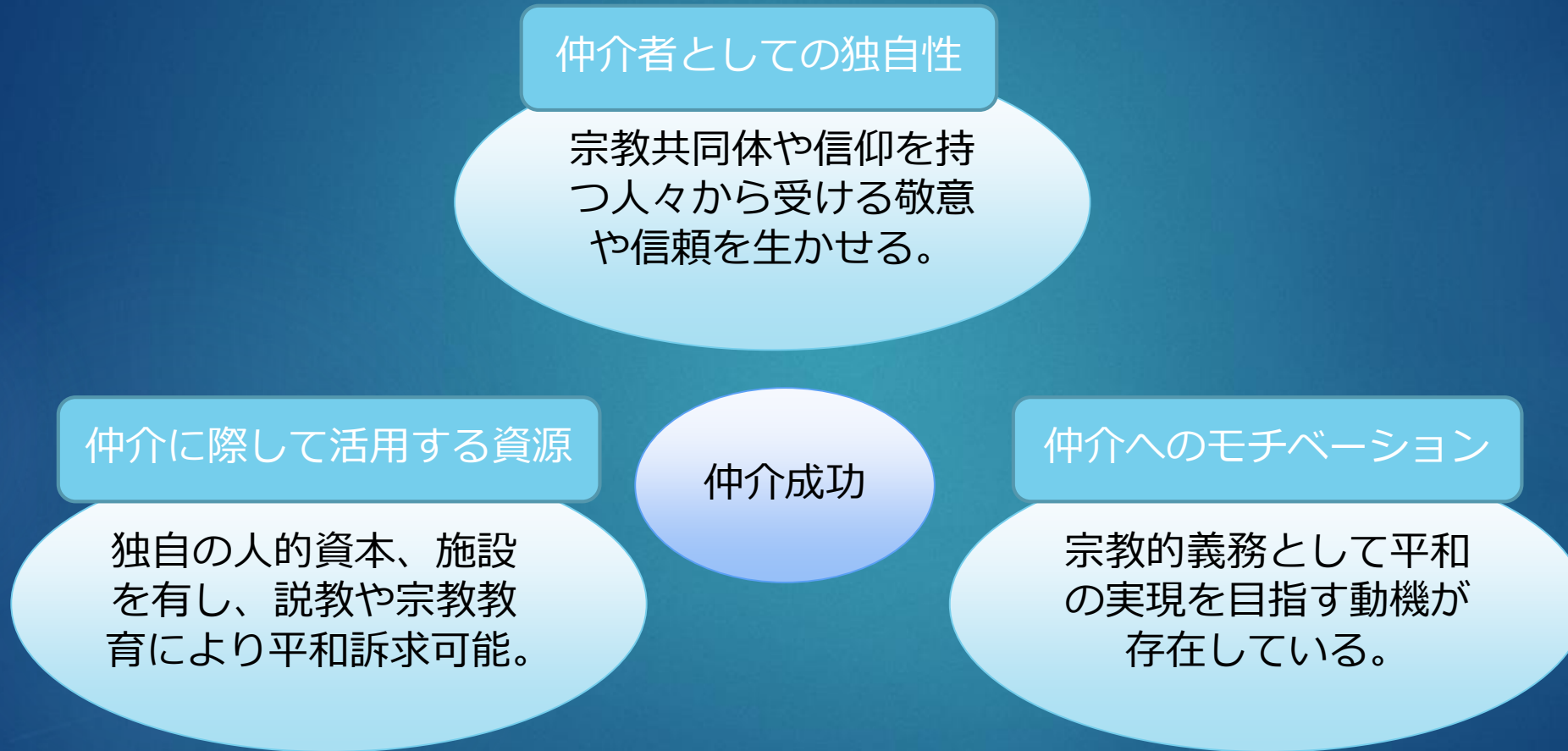
→ 紛争後の社会において、民主的で正当かつ平和な未来を構築するために、過去に起こった人権侵害、大規模虐殺、深刻な社会的トラウマに対する社会の取り組み。

Ⅱ.平和を促進するもの（宗教と平和）

- ▶ 宗教アクターによる紛争解決（仲介）のための要件
- ▶ 一般的理論として、仲介の成功には、仲介者としての「正当性」と「影響力」を確保することが必要とされる。
- ▶ 宗教アクターには、「正当性」と「影響力」に関して、
 - ①仲介者としての独自性
 - ②仲介に際し活用する資源
 - ③仲介へのモチベーションの3点で独自性がある。

Ⅱ. 平和を促進するもの（宗教と平和）

▶ 宗教アクターによる紛争解決（仲介）のための要件



Ⅲ.メディアで流布している言説

- ▶ 同時多発テロ（9.11）以降、
メディアでは、「アメリカVSイスラム」という構図で様々な意見が述べられている。
- ▶ 「宗教戦争」という形で一括りで語られることが多い。



同時多発テロ

(画像引用URL : http://jp.wsj.com/public/page/0_0_WJPP_7000-301780.html)

IV.教材化のメリット

- ▶ 「平和」を考える際に、宗教の問題は不可分なものとなっている。
(例) イスラム国など
- ▶ 宗教という「扱いにくい」問題を、中立的な視点で扱うことができる。
- ▶ 紛争解決という一般化も図ることができる。

4 社会的アイデンティティ理論

I .促進阻害条件に関する理論

- ▶ 社会的アイデンティティとは「ある個人の感情的および価値的な意味づけを伴う自分がある社会集団に所属しているという知識」であると定義されるものである。(Tajfel,1972)
- ▶ ここでいわれる社会集団とは「共通の社会的アイデンティティを分けもつ2人以上の個人の集まり」のことである。
(Turner,1982)

▶ 社会的アイデンティティ理論とは...

- ①我々是人々を内集団か外集団の社会的カテゴリーに分類化し、
- ②内集団の一員であるという社会的アイデンティティから自尊感情が高められ、
- ③内集団をどう評価するのが我々の自己概念そのものを規定するとする理論のことである。

▶ この理論は、我々はしばしば内集団に対して好意的な態度を示し、外集団に対しては内集団への態度と対照的な態度をとるという区別について説明するために提唱された。

▶ この社会的アイデンティティには3つの特徴がある。

① 想定された類似性効果

自分と内集団の成員は類似していると思い込むこと

⇒ 外集団の人が自分と同じ興味や関心を有してもそのことに気づかず、正反対の趣味をもつ内集団の人の方に親近感を感じる。

② 外集団の統一性効果

外集団の個々人が皆同じであり、ステレオタイプによって特徴づけられる人間性を有していると思い込むこと

⇒ 内集団の人に対して、我々は1人1人の個性を認識できるが、外集団の成員に対してはステレオタイプ通りの特徴しかみれない。

③内集団ひいき効果

内集団の人をより好意的に評価し、その人の行動も都合の良いように帰属すること

⇒内集団の人が好ましい行動をすれば、それはその人の内面的な特徴によって行われたと理解され、好ましくない行動をすれば、それは外的な要因に帰属される。

▶ 社会的アイデンティティの弊害

社会的アイデンティティ
が強い



自尊心がある集団に属
することから得られる故、
内集団の面子を維持しよ
うとする



社会的比較を通じて外集
団の粗探しをし、内集団
の有為な特徴を誇張する



人種差別行為などといっ
た集団間差別が起こる。
(= 非平和な状態)



個人としては非合理的で
誤っていると認識される
行動でも、集団性が高ま
れば実行される



集団の規範や価値観が本
人の態度や行動の基準と
なり、「没個性化」が進
み「集団思考」という現
象を引き起こす

▶ 社会的アイデンティティの弊害の具体例

社会的アイデンティティが強い



会社において、高学歴の集団に属することにより自尊心が得られるので、高学歴集団としての面子を保とうとする



相対的に低学歴な集団の粗探しをし、高学歴集団の有為な特徴を誇張する



低学歴集団に対する差別やハラスメントが起こる。
(= 非平和な状態)



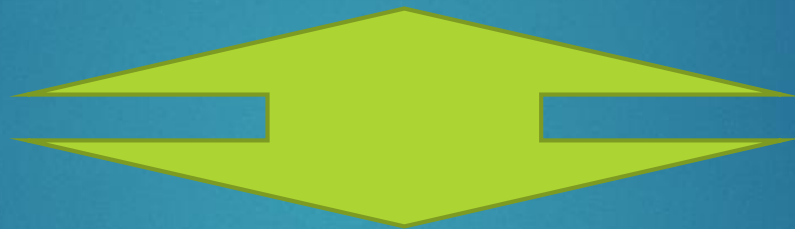
高学歴者の誰かが低学歴者に対してハラスメントを行うことで、高学歴集団によるハラスメントが促される。



高学歴集団内の規範や価値観が個人の態度や行動の基準となり、「没個性化」が進み、「集団思考」という現象を引き起こす

- ▶ 内集団とそれに対するステレオタイプのな外集団を形成し、集団間で差別やそれに基づくハラスメントなどが生じている状態

= **非平和な状態**



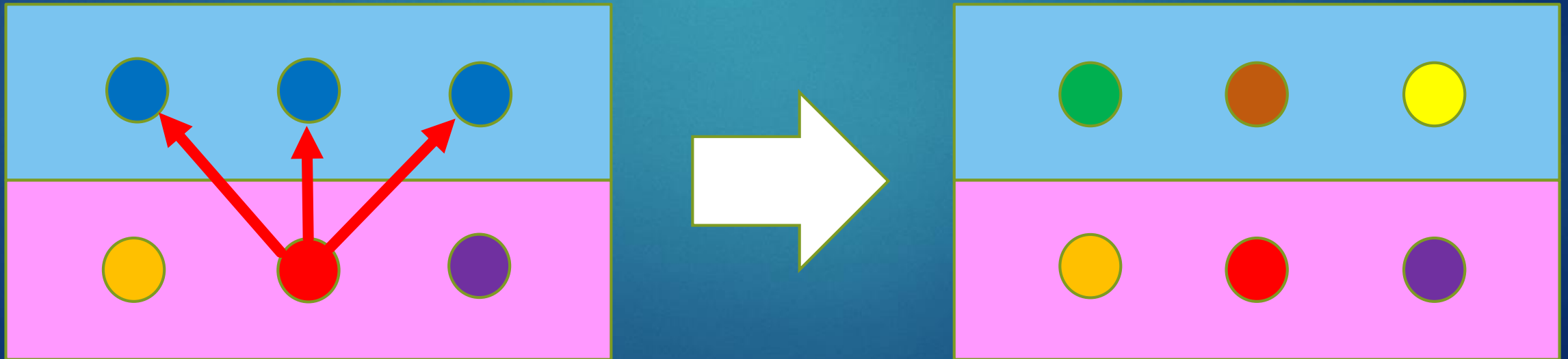
- ▶ ステレオタイプのな外集団を形成せず、集団間で差別やそれに基づくハラスメントなどが生じていない状態

= **平和な状態**

- ▶ このような非平和な状態を解消する手立てとして4つ挙げられる。

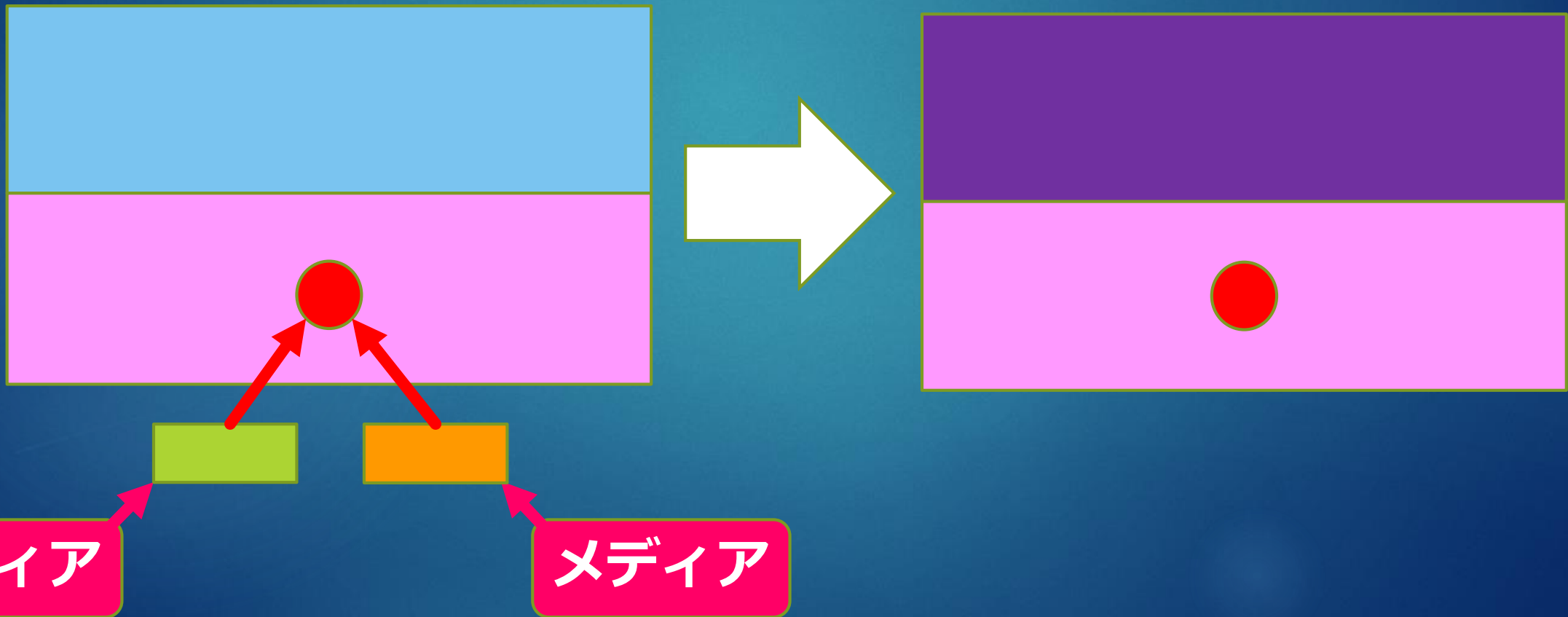
①接触理論

外集団の様々な人間との接触を頻繁に経験させることによって、
外集団の一員は一様ではなく、一人ひとりが個性的であること
に気づかせる。



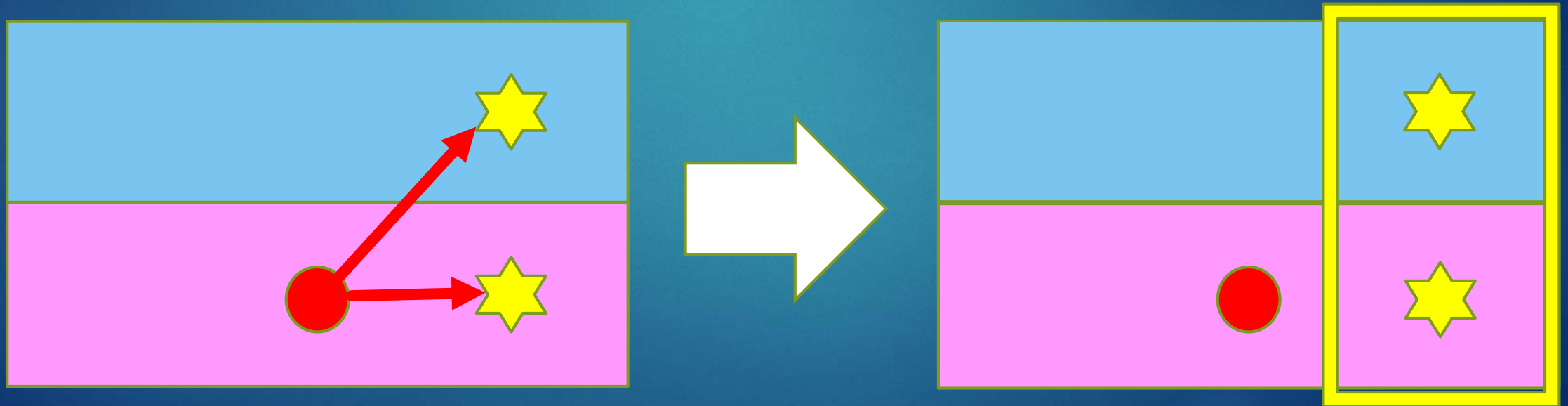
②メディアを通じての社会的学習

メディアから発信される多くの情報に基づく複雑なステレオタイプを学習させることによって、特定のメディアによって提示されるステレオタイプとしての集団が現実の集団とは異なることに気づかせる。



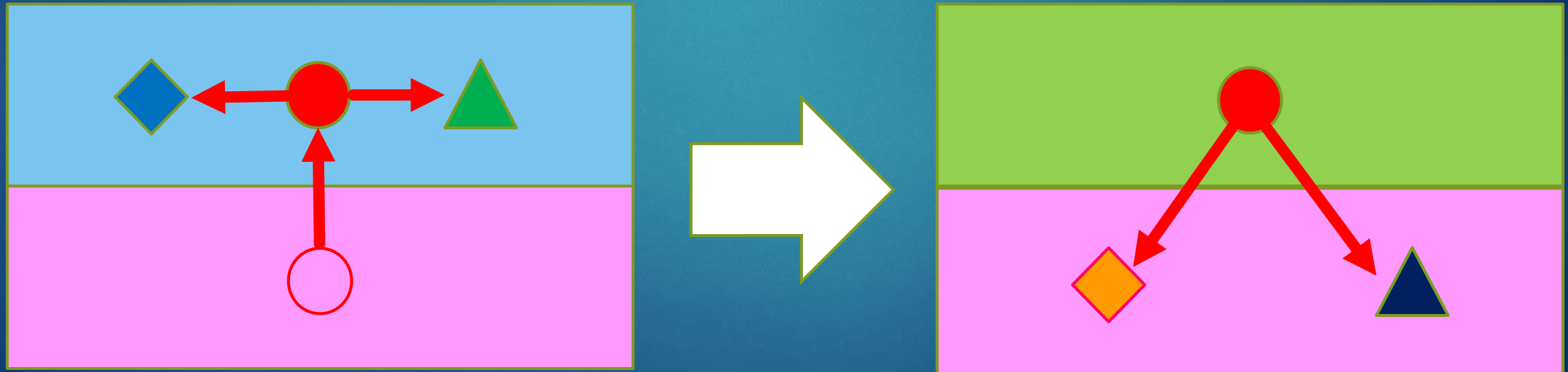
③ 認知的方略

外集団と内集団についての類似性について探り、明らかにすることによって、それぞれを一部分的に、または、全体的に包括する集団の存在があることに気づかせる。



④多様性訓練

異なる集団の中に入り、その中で異なる集団の文化や認知、感情や行動について探り、明らかにすることによって、内集団の常識が世界の常識と異なることに気づかせたり、異なる集団の立場から物事が理解できる共感性を獲得させる。



Ⅱ. 平和を拒むもの・平和を促進するもの

- ▶ ここにおける平和とは「集団間差別が起きてない状態」のことである。
- ▶ この平和を拒むものは「想定された類似性効果」「外集団の統一性効果」「内集団のひいき効果」の特徴を有し、それゆえに「集団間差別が起きている状態」を引き起こす「**社会的アイデンティティ**」である。

▶ 反対に、平和を促進するものは、「集団間差別が起きている状態」を解消する手立てとして前述した4つのものであるが、それら全てのねらいを達成できるものが究極的な促進するものといえる。

i .一人ひとりが個性的であることに気づかせる。

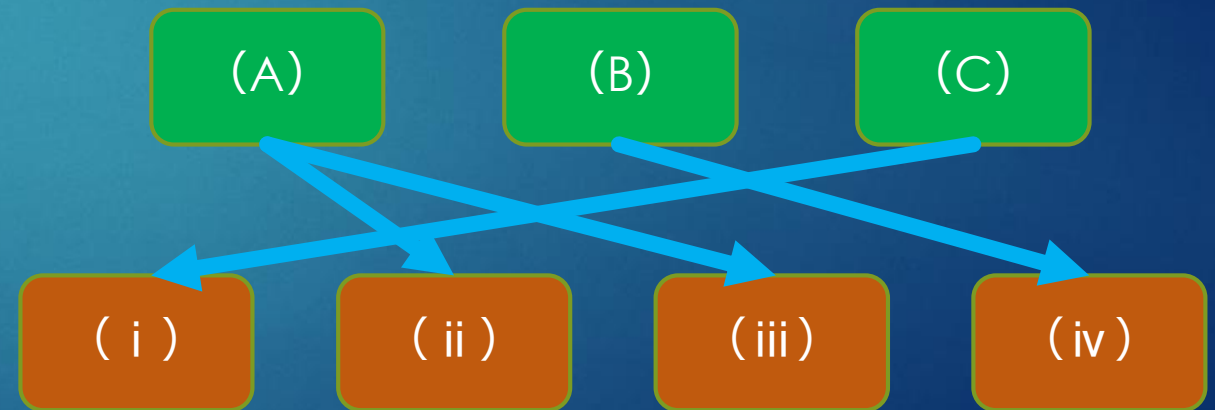
ii .ステレオタイプとしての集団が現実の集団と異なることに気づかせる。

iv .内集団の常識が世界の常識と異なることに気づかせたり、異なる集団の立場から物事が理解できる共感性を獲得させる。

iii .それぞれを一部分的に、または、全体的に包括する集団の存在があることに気づかせる。

- ▶ つまり、「日本人としての私」や「英語を話す者としての私」といったような「**複アイデンティティ**」を有することで、
- (A)：様々な立場の視点や考え方があることに気づくことができる。
 - (B)：(A)に基づいて集団や物事について考えることができる。
 - (C)：集団に対する個人は独自の「複アイデンティティ」を有した没価値的な存在でないことに気づくことができる。

- ▶ (A)(B)(C)は4つのねらいに右のように繋がる。よって、**複アイデンティティ**は、平和を促進するものとしていえる。



Ⅲ.展開 1 との関わり

- ▶ 社会的アイデンティティが「集団間差別が起きていない状態」という平和を阻害するものである一方で、促進するものとして挙げられるのが、展開 1 で取りあげられた複アイデンティティである。
- ▶ この点において社会的アイデンティティ理論は展開1で述べられた複アイデンティティと関わりがあるといえる。

IV.メディアで流布している言説

- ▶ 社会的アイデンティティの具体的事例として以下のようなものが挙げられる。

①原因帰属誤認

内集団において誇りが持てないなどの望ましくない社会状況の原因を外集団に求めること



ex. ジャパン・バッシング

1980年代のアメリカは経済低迷がつづき、多くの失業者が出る一方で、アメリカには日本製品の占有率が上昇した。アメリカの労働者は経済低迷や失業によって喪失したプライドを回復するために、外集団としての日本に敵対意識をもち、経済低迷などの原因を日本に転嫁した。



アメリカが
貧しいのはお前ら
日本人のせいだ！

え？
僕たちのせい？

在米日本人への偏見・差別が起きることとなった

②スケープゴートینگ

内集団の憂いを外集団に原因を追求する現象のこと

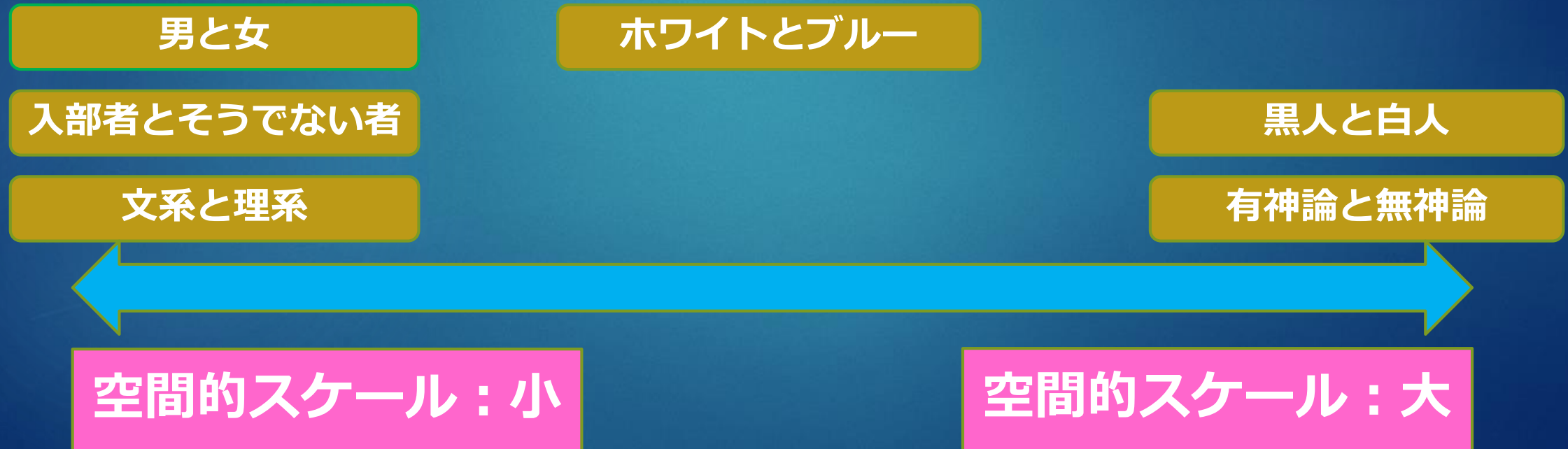
ex.選挙前の政党の訴え

〇〇党員、そして、〇〇党を支持する人々が社会生活において心配をしなくてはならないのは、
××党の考えや政策に欠点があるからである！といったような主張が多くなされる。



V.教材としての適切性

- ▶ 内集団と外集団について、学校現場における男と女、部活への入部者とそうでない者、文系と理系などといった身近なものから、人種(ex.黒人と白人)、職業(ホワイトカラーとブルーカラー)、文化(ex.有神論と無神論)といった地域社会・世界規模のものにまで幅広く考えることができる。



5 TOC思考プロセス

I .促進阻害条件に関する理論

- ▶ TOCとは、Theory of Constraints、日本語では制約理論と訳されるものである。
- ▶ TOCとは、1974年にイスラエル人の物理学者、エリヤフ・M・ゴールドラットが開発した問題解決手法のことである。
- ▶ TOCは、主に経済活動における生産プロセスの課題を克服することを念頭に開発されたものであるが、このTOCの思考プロセスは企業に限らず、病院、学校、政府組織、軍隊など人間が介在する組織が抱える問題の解決に寄与し得るとされるものである。

- 
- ▶ TOC思考プロセスとは、人が介在する組織が抱える、複雑な問題の解決を目指した思考法ということができる。
 - ▶ この思考プロセスは、大きな3つのステップから成り立っている。
 - ①What to change ? (何を変えるのか?)
 - ②To what to change ? (どのような状態に変えるのか?)
 - ③How to Cause the Change ? (どのようにして変えるのか?)
 - ▶ そして、これらの問いに答えるために5つのツールが用意されている。
 - ①現状問題構造ツリー ②対立解消図
 - ③未来問題構造ツリー ④前提条件ツリー
 - ⑤移行ツリー

- ▶ この3つの問いは、5つのツールと以下のように関係している。

何を変えるのか？ What to Change？		どのような状態に 変えるのか？ To What to Change？	どのようにして 変えるのか？ How to Cause the Change？	
現状問題 構造ツリー	対立解消図	構造ツリー	前提条件 ツリー	移行ツリー

1つのツリーを用いるだけでも問題解決としての効果を発揮する。

- 
- ▶ 5つのツリーのうち、このTOC思考プロセスにおいて、問題(非平和と予想されるもの)を中心的に扱うのが「対立解消図」である。

- ▶ 対立解消図・・・共通の目的Aを達成するためにBとCの2つの必要条件が存在し、さらにはBとCそれぞれにDとD'という必要条件がありそのDとD'の矛盾
 - ・対立を描いた図

**B : Aのための
必要条件**

BなしにはAは
存在しえない

**D : Bのための必要条件で
ありAのための前提条件**

DなしにBは存在しえない。
DとD'は共存できない

対立

A : 共通の目的

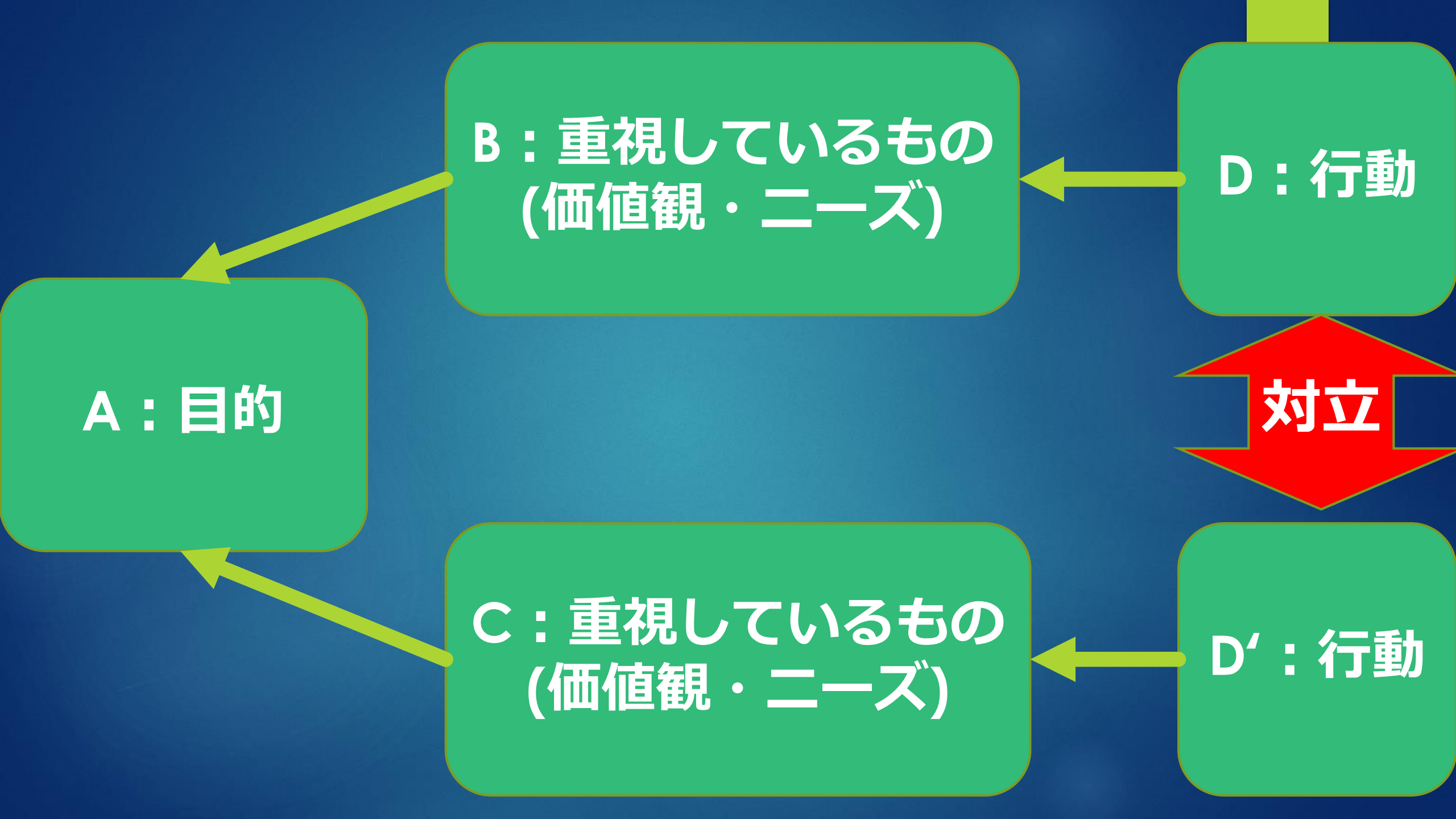
Aが成立するた
めにはBとCの両
方の存在が必要

**C : Aのための
必要条件**

CなしにはAは
存在しえない

**D' : Bのための必要条件で
ありAのための前提条件**

DなしにBは存在しえない。
DとD'は共存できない



改善に貢献した部門の人たちを部門間異動させないこと

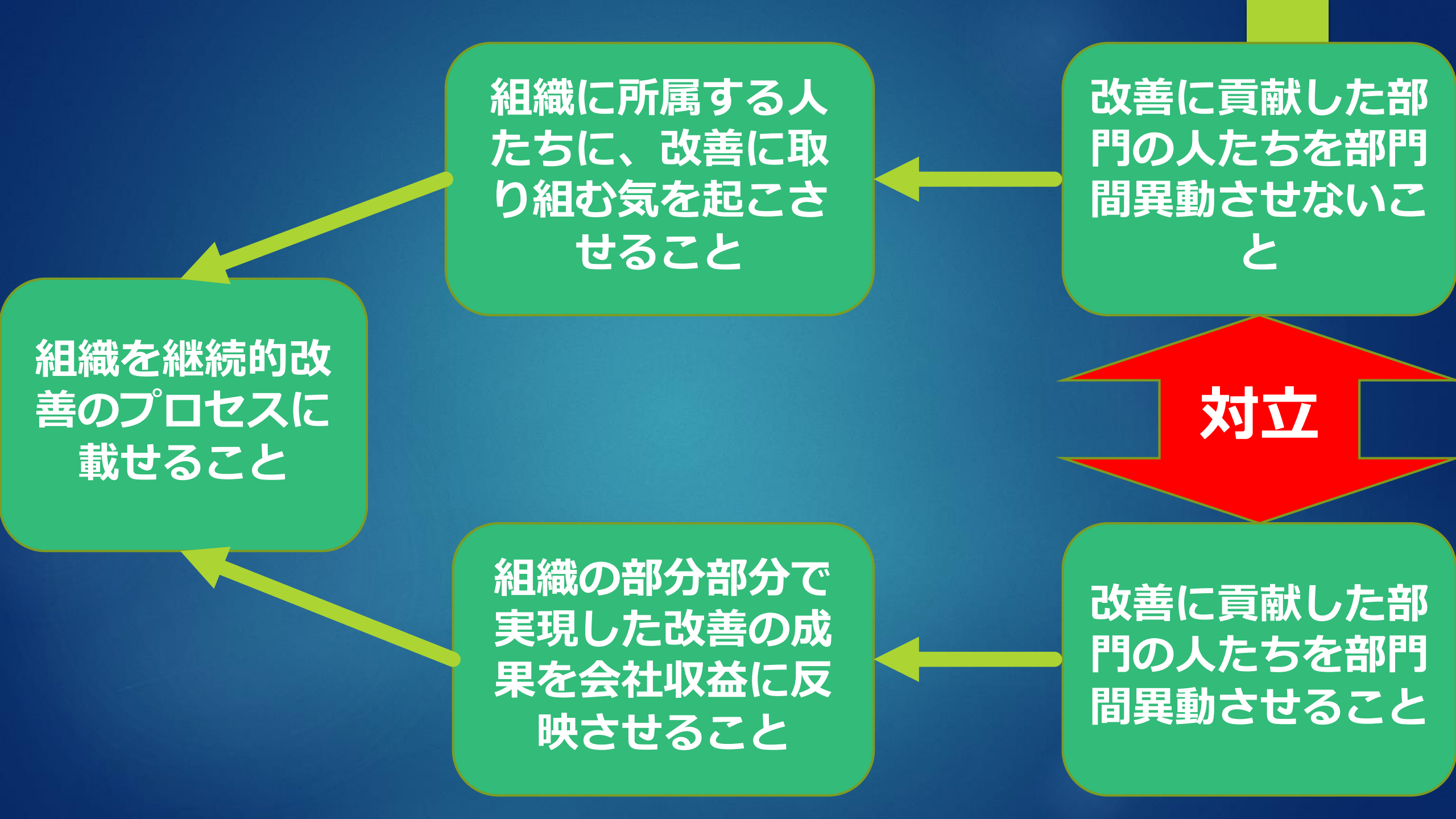
組織に所属する人たちに、改善に取り組む気を起こさせること

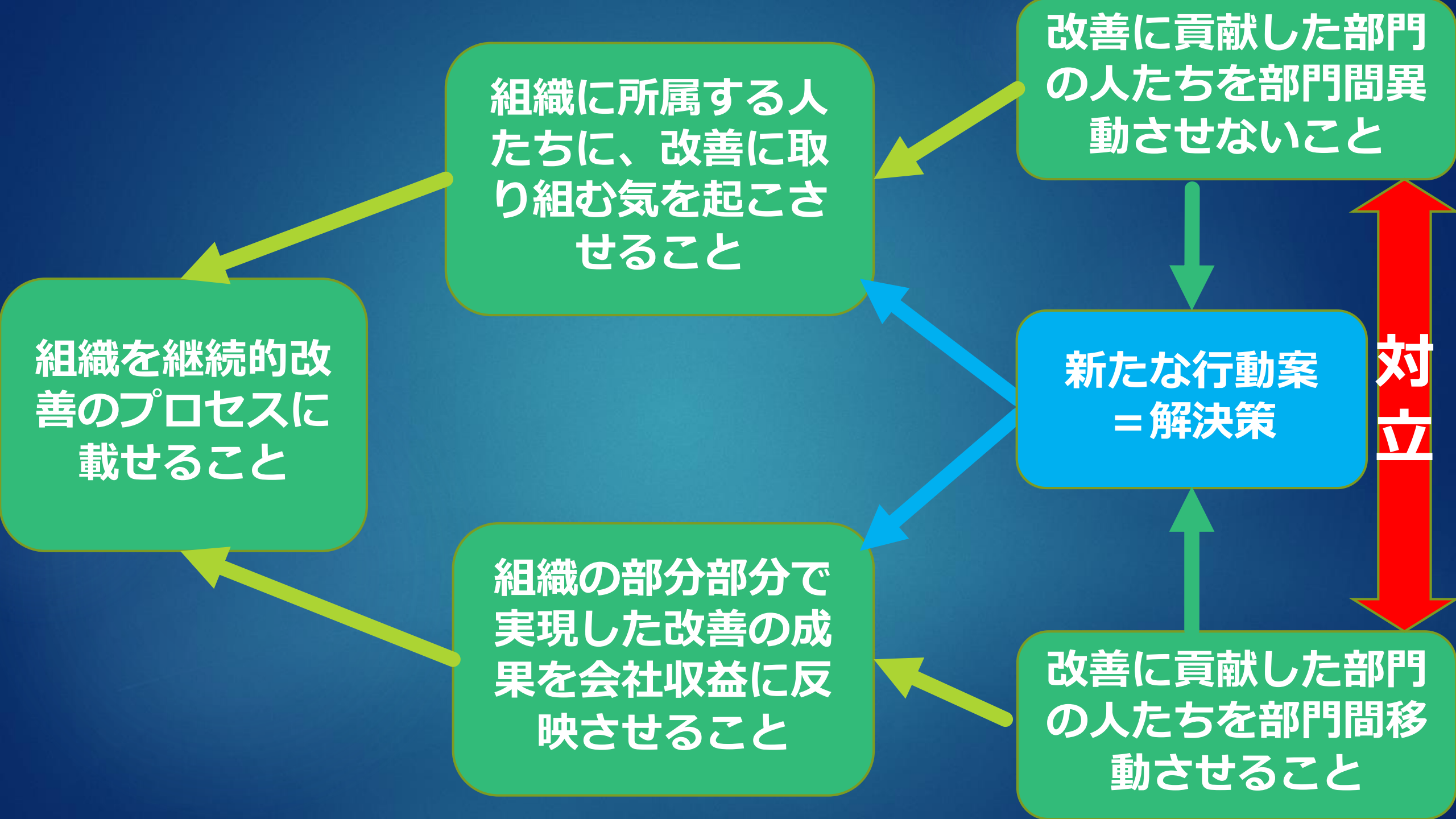
対立

改善に貢献した部門の人たちを部門間異動させること

組織の部分部分で実現した改善の成果を会社収益に反映させること

組織を継続的改善のプロセスに載せること





Ⅱ.平和を拒むもの・促進するもの

- ▶ ここでの平和とは「ある1つの『目的』の達成のために複数存在する『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の実現に向けて行われる『行動』の対立がなく、『目的』が達成された状態」のことを指すと考えられる。
- ▶ 我々はしばしば何か対立が起こった際、それは「重視しているもの(ニーズ・価値観)」の対立であると捉える傾向がある。
- ▶ しかし、実際に対立しているのは「重視しているもの(ニーズ・価値観)」ではなく、その達成に向かって行われる「行動」である。

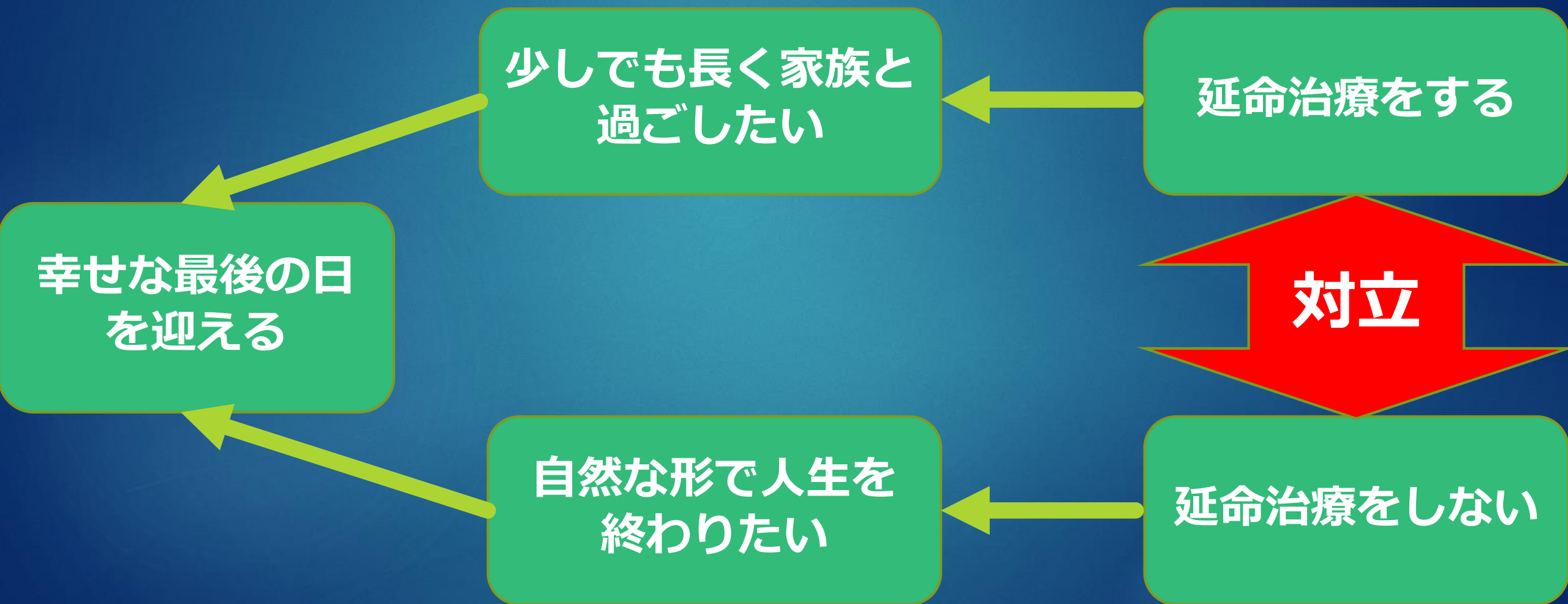
- ▶ 平和を促進するものとしては「複数の『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の実現が可能な方策の思考・提案」であるといえる。
- ▶ また、その前提条件である「対立とは『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の対立ではなく、その『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の実現に向かう『行動』の対立である」という対立の捉え方も平和を促進するものであるといえる。
- ▶ 反対に、「対立とは、『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の対立である」という対立の捉え方、そして、それに基づく「複数の『重視しているもの(ニーズ・価値観)』の実現が不可能な方策の思考・提案」が平和を阻害するものとして挙げられる。

Ⅲ.展開 1 との関わり

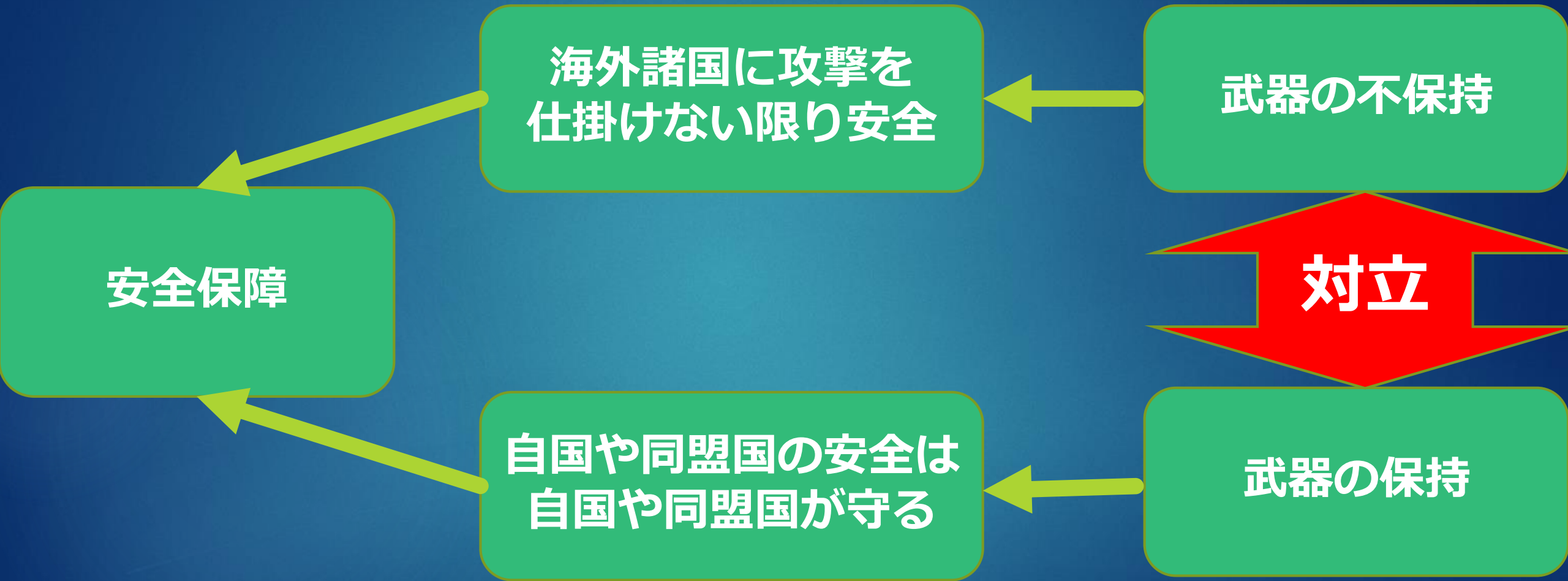
- ▶ このようなTOC思考プロセスには以下のような特徴が挙げられる。
 - ・ 異なる考えや価値観を有している人が平和的な共存関係を構築することを意図している
 - ・ 問題・対立を回避・解消するための思考やスキルの習得を目指している
 - ・ Win-Winの解決が目指されている
- ▶ これらの特徴はpeer mediationやconflict resolutionの共通点と合致することから、それらが想定している平和、そして、その実現方法とこのTOC思考プロセスのものとは類似していると考えられる。

IV.メディアで流布している言説

◎ 尊厳死についての賛否



◎ 武器の保持についての賛否



V.教材としての適切性

- ▶ このような『行動』における対立は、「個人内」「個人間」「集団間」などの複数のスケールで発生する可能性があり、学校内での身近な対立から学校外の地域社会・国際社会の対立といった様々スケールをそれらをこのTOC思考プロセスを用いて考えることができる。



6 まとめ

▶ 【対象範囲】

1 権威主義的パーソナリティ

2 ラベリング論

3 宗教と紛争解決学

4 社会的アイデンティティ

5 TOC思考プロセス

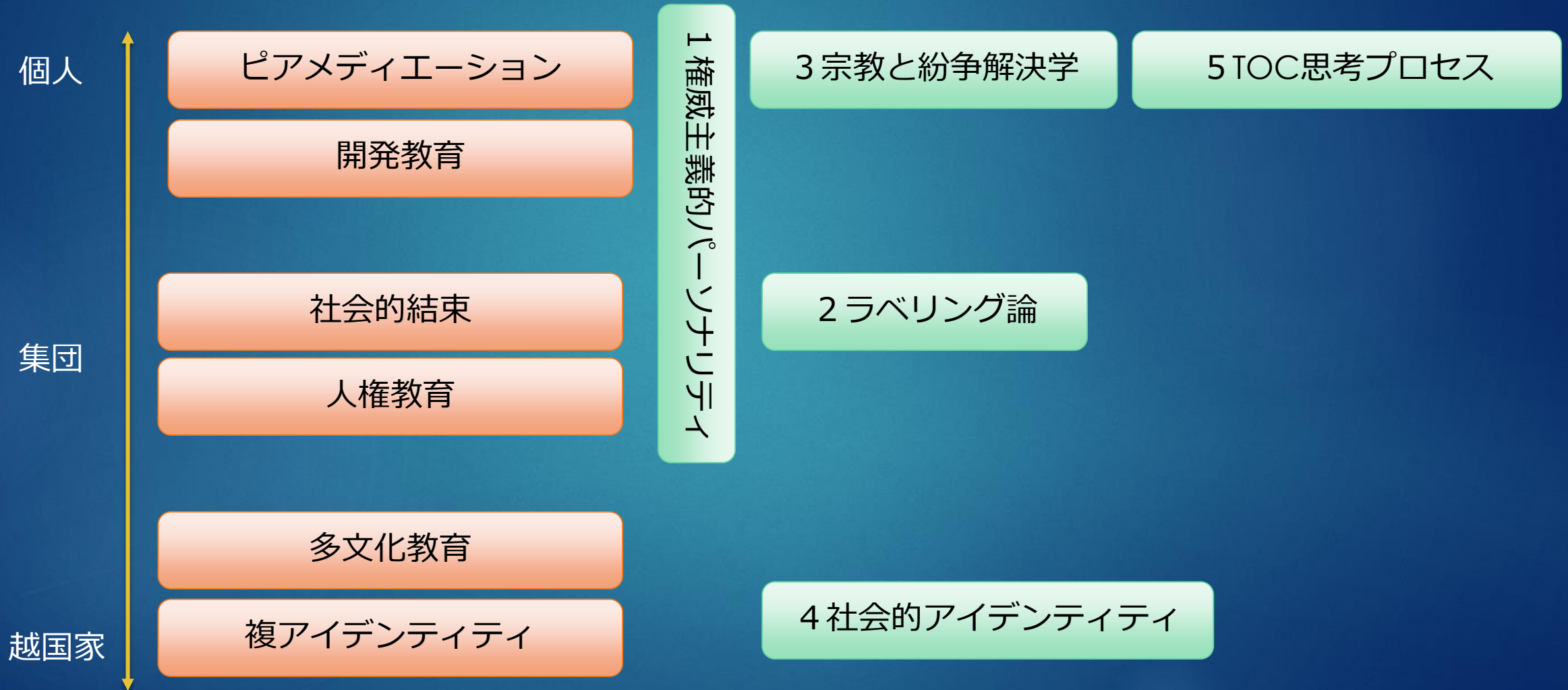
個人

集団

越国家

6 まとめ

▶ 【展開 1 との関係】



7 参考文献

- ▶ 松田健編 『テキスト現代社会学』 2003 ミネルヴァ書房
- ▶ 榊博文 『社会心理学がとってもよくわかる本』 2008 東京書店株式会社
- ▶ 井上隆二・山下富美代 『図解雑学 社会心理学』 2000 ナツメ社
- ▶ 岡邊健編 『犯罪・非行の社会学 常識をとらえ直す視座』 2014 有斐閣ブックス
- ▶ 名古屋渉 『宗教と紛争解決：宗教アクターによる紛争解決の要件に着目して』 2016 コスモポリス
- ▶ 石田忠由・佐々木俊雄（2003）「思考を変える！見方が変わる！会社が変わる！会社のダメなところがわかる“TOC思考プロセス”」中経出版
- ▶ 小林英三（2000）「制約理論（TOC）についてのノート」ラッセル社
- ▶ 吉田俊和・松原敏浩（1999）「社会心理学 個人と集団の理解」ナカニシヤ出版

7 引用参考文献

- ▶ M.A.ホッグ/D.アブラムス著,吉森護・野村泰代訳 (1995) 「社会的アイデンティティ理論 新しい社会心理学体系化のための一般理論」 北大路書房
- ▶ <http://toyokeizai.net/articles/-/154605> (画像1 : ジャパンバッシング)
- ▶ <http://jcp-iwate.jp/%E8%A1%97%E9%A0%AD%E6%BC%94%E8%AA%AC%E3%83%BB%E5%AE%A3%E4%BC%9D/4%E9%87%8E%E5%85%9A%E5%90%88%E5%90%8C%E8%A1%97%E9%A0%AD%E6%BC%94%E8%AA%AC%E3%81%AB%EF%BC%91%EF%BC%90%EF%BC%90%EF%BC%90%E4%BA%BA%E8%B6%85%E3%81%88%E3%80%82%E5%B0%8F%E6%B1%A0%E6%9B%B8%E8%A8%98%E5%B1%80/> (画像2 : 野党演説の様子)